

〈翻刻〉奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）巻九～巻十

（人文・社会科学 日本古典文学研究室）小助川 元太

【凡例】

- 一．底本は奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（一二巻、寛永四年（一六二七）、八尾助左衛門尉版、請求番号貴重書庫388.491-12）により、今回は巻九と巻十を翻刻した。なお、本テキストの巻一から巻四の翻刻については、小助川「〈翻刻〉奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（巻一～巻四）」（『呉工業高等専門学校研究報告』七〇号、二〇〇八年八月）に、巻五と巻六の翻刻については、「〈翻刻〉奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（巻五～巻六）」（『愛媛大学教育学部紀要』第五九巻、二〇一二年一〇月）に、巻七と巻八については、「〈翻刻〉奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（巻七～巻八）」（『愛媛大学教育学部紀要』第六〇巻、二〇一三年一〇月）に掲載している。
- 二．本書には各話ごとに一丁分の挿絵があるが、誌面の都合上割愛し、本文の翻刻のみとした。
- 三．本文には虫損による判読困難なところが数箇所見られるため、京都大学図書館近衛文庫蔵『帝鑑図説和訓』（一二巻、慶安三年（一六五〇）、請求番号018447-1貴）を参照して補った。
- 四．旧字体・異体字・俗字などではできるだけ通行の字体に改めた。
 (例)「國」↓「国」、「醫」↓「医」、「迄」↓「迄」、「當」↓「当」、「・」↓「寵」、「哥」↓「歌」
- 五．底本の誤字などはこれを尊重し、とくに改めなかった。

六．カタカナの「ハ」・「ミ」などはひらがなに統一した。

(例)「くはうてい」↓「くはうてい」、「よびしハ」↓「よびしは」・「したしミ」↓「したしみ」

七．踊り字については、ひらがなで翻刻した場合は「ゝ」「ゞ」、カタカナの場合は「ゝ」「ゞ」、漢字の場合は「々」に統一した。また、「く」については、送り仮名と漢字については文字になおし、それ以外はそのままとした。

八．読解の便を考慮し、私に句読点等を補った。

九．濁点は本文のままとした。

十．改丁箇所については明記したが、改行についてはとくに示していない。

十一．丁数については、実際の丁数と柱の丁番号にズレが生じているため、実際の丁数を示しているところがある。

【書誌】

〈形態〉古活字本。

〈巻冊〉十二冊。ただし、六冊ずつ上下二冊の合本形態。

〈丁数〉巻一のみ序文「帝鑑図説和本序」三丁分あり。その他、各巻ごとに一丁分の目録あり。巻一（二十六）、巻二（二十三）、巻三（三十四）、巻四（三十一）、巻五（三十九）、巻六（四十六）、巻七（三十）、巻八（二十八）、巻九（三十二）、巻十（三十三）、巻十一（二十七）、巻十

りさま、申もおろかなるとかや。かゝりける所に、后羿と申て、一人のしんかあり。つくゞ心におもふやう、あらうらめしの我が君や。無道第一世にすくれ、山野のかりに身をやつし、天下のまつりこともなく、さて又、国家のたみどもの、なげき」(二丁裏) かなしむありさまは、もつともなりとかんじつゝ、しよせんたゞ此君をふたゝびみやこへいれじとて、つわもの数十騎ひきぐして、てんでにゆみやをひきながら、浴水のほとりへたちいてゝ、くわんぎよをふせぎたてまつる。さるあひだ、太康は、さうなう禁中へ御かへりあるへきやうなければ、たちまち天下をうしなはせ給ひて、陽夏と申ところへやう／＼おちゆき、つゐにむなしくなり給ふ。その御おとうと五人ありしが、まことにこれかなしみ、たがひにおほせけるやうは、さればにや、おうぢ大禹は天下に聖人のその名をえて、国家をおさめ給ふ事、よろつにつめてくら」(二丁表) からす。かるがゆへに、われらがちゝ王啓の御代にいたるまで、太禹のみちをつぎきたり、てんか太平にありしかども、いま太康にいたつて、つゐに国をうしなひて、王職すでにたへぬる事、むねんなりき次第とて、五首のうたをつくり、うらやみ給ふ御事はことわりとこそきこえけり。」(二丁裏)

挿絵 「(三丁表)

挿絵 「(三丁裏)

脯 林 酒 池

夏の桀王と申て御かど一人ましますが、ぶたう第一にして、天下のまつりごとをもしたまはず、あるとき有施氏の国をたいぢして、美人一人えたまへり。その名を妹喜と申ける。妹喜、てうあひあさからず。故に、よろつ妹喜のの給ひし事にしたがひ給ひて、たまのうてなをたてゝ、はなやかにかざり、ゑいぐわにおごらせ給ふゆへ、たみ百性のぞいほうをうばひ取のみならず、たみのちからをつみやし給へり。又、桀王、もとより酒をこのみ、ゑいぐわ

をほしひまゝにして、ちくるいてうるいのにくをあつめて、山のこづくに」(四丁表) つみ、これをむしてほぢしとなし、かけならへておきたるは、まことにはやしのこづくなり。又、おほきなるいけをほり、酒を入れて水となし、則ふねをうかべたまへり。又、かすをつみてつゝみとなし、そのたかき事、十里におよべり。一たびつゞみをうつをあいずとして、人々いけのほとりにあつまり、かうべをかたむけ、池の酒をのむものは、まことに牛の水をのむがごとし。そのかず三千人とかや。桀王と妹喜と此よしを御覧じて、よろこび給ふはかぎりもなし。たゞあけてもくれてもかやうの事をのみたのしみとして、天下のまつりごとのおこたる事、申もおろかなる」(四丁裏) とかや。それ桀王は、いにしへ禹王のしそんたり。然るに、禹王、天子のくらゐたりとは申せども、御殿をもしやうつくり、又、衣裳をもおろそかにして、ゑいぐわをこのみたまはず、つとめて天下の太平ならん事のみをおもひたまへり。しかるに、儀狄といひじもの、よく酒をつくれり。ある時、儀狄、さけをもつて禹王にすゝめしかば、禹王、このさけをあまないたまひておぼしめされけるには、これより以後、我かしそんたるべきもの、ほしひまゝにこのさけをのまば、かならず国をほろぼすへきと、ふかくきはせ給ふゆへ、かの儀狄をとをくおしいりぞけて、二度ちかつけまします。」(五丁表) 桀王、そのしそんたりとは申せとも、禹王のをしへにそむきつゝ、かやうにおごらせ給ふゆへ、つゐに天下をほろぼせり。其後六百餘年すぎてより、殷の紂王と申せし人、かの桀王のこづく、酒を入れていけとなし、かすをつゝみとしたまひて、ゑいぐわにおごり給ふゆへ、殷の天下をうしなへり。こゝをもつて見る時は、酒はこれ、わざわひたり。まことにさけをこのむ人は、これをかゞみどすべきなり。」(五丁裏)

挿絵 「(六丁表)

挿絵 「(六丁裏)

革囊射天 商の武乙と申て御門一人ましますが、まことに無道にして、天道をもうやまひ給はず。しかるに、武乙、木をもつて人形をつくりたまひて、これを天神となづけ、てんたうをひようし給へり。武乙、この天神をともとして、ばくちをうち給ふ。これてんじんは木でつくりたる事なれば、いかんとしてかかなふへき。故に、そばに人をおかせ給ひて、天神のだいをさせ給ふ。然るに、天神まくるときはすなはちてんじんをうちくだけり。是、天道をがいするにたり。又、皮をもつてふくろをぬい、うちにいきたるものゝ血を入、たかく(七丁表)、こくうにかけて、みづから弓をもち、うちあをぬいて、いたまへり。これを射天と名づけ給ひて、天道をいるのまなびたり。然るに、くらゐにそなはりまし〜てより、すぎし五年と申には、河渭といふところへかりにいでさせ給ふ時、にはかにいかづちなりて、天地をひゞかせしかば、武乙、これにおとろき給ひて、つゐにむなしくなり給ふ。それ天下の君たる人は、天をうやまふをもつて、おほひなりとせり。かるがゆへに、詩にいわく、これをうやまひこれをおやまふ。天これ思ひをあらはして、めいやすからずやといへり。もし天道をおそれずんば、いづれをおおそるべし。武乙はあく(七丁裏)ぎやくぶたうにして、人をもおそれず、天道をもうやまはず、天神をつくり、射天をなす。まことにつみを天にえては、のがるゝにところなし。いかづちたちまちくだりて、つゐに武乙をほろぼせり。これてんぼつのいたる事、あきらかなるしるべなり。(八丁表)

白紙 「(八丁裏)

挿絵 「(九丁表)

挿絵 「(九丁裏)

姐己 害政 商の紂王と申して、ぶたう第一の御門あり。ある時、数万のぐんびやうをもよほして、有蘇氏の国をせめ給ふ。有蘇氏、きみのいせいにおそれて、すなはち姐己と申せし美人一人おはしけるを、紂王へたてまつり、すてに降参申ける。紂王、此びじんをえて、なのめならずにおほしめし、てうあひならびなかりけり。故に、よろつ衣裳にいたるまで、姐己のこのみにまかせて、はなやかにかざりつゝ、姐己のこゝろをよるこばせ給ふ。又、楽官師延と申ものに仰せられ、朝歌北鄙のうたをうたはせ、北里のまひをまはせ、靡々のおんがくをな(十丁表)して、姐己をなぐさめ給へり。又、鹿臺の一座をつくり、たまをもつて宮室をかざり、玉石をもつて門たて、ゑいぐわは申はかりなし。たみのざいはうをうばいとり、みなわたくしのたのしみとす。かるがゆへに、鹿臺には金銀みち、鉅矯のくらはよねおほし。かゝるふつきのあまりにや、かすをつみてつゝみとし、酒を入れていけとなし、ちくるいてうるいのにくをかけて、おほひなる事、はやしのごとし。男女をはだかになして、其あひだをはしらせたまへり。又、禁中に九の所にいちをたて、往來の人にまじはりて、たがひにまいばいをなされけり。あるひは君臣まじはりて、(十丁裏)しゆゑんゆうぎやうのたのしみ、ゆふべにはじまりぬれば、すでにあけなるとする時をしらず。ゑいぐわはかぎりなかりけり。故に、たみ百性、国々の守護迄も、君にそむきたてまつる。姐己、此由をきくよりも、則申けるには、是は我が君紂王の、法度かるくして、けいばつこのうすきゆへなりと申せしかば、紂王、げにもと思召、銅をもつてはしらとし、あぶらをぬりてはしにかけ、下にすみ火をおこしつゝ、すこしとがあるもの迄も、かのあかゞねのはしらのうへを、あとよりおいかけ渡しける。火気はなはだしうして、はしらあつく、あぶらながれてなめらかなり。いかんどしてかあゆ(十一丁表)むべし。たちまち火中に落入て、やけしなざるはなかりけ

り。妲己、此由見るよりも、よろこぶ事は限もなし。かゝるきびしきいましめを、名づけて炮烙の刑と云。それ商の紂王は、聞くへ見る事におゐては、はやく其りをさとり、さいち人にすぐれたり。故に、したしく賢人を近付て、いさめをきこしめされず。たゞ我が心をほしひまゝにして、あくぎやく無道をし給ふ事、其数いかでつきぬへし。鄂侯をしゝほにし、比干がむねをさき、かゝるちうしんをころしたまへり。へいぜいしたがひ給ふは、誠に后のことばのみなり。それ天下をたもつものは、たゞつゝしむにしくはなし。」

(十一丁裏)

挿絵 「(十二丁表)

挿絵 「(十二丁裏)

八 駿 巡 遊

周の穆王とて、御かど一人おはしけり。しかるに、造父と申臣下あり。よく車を御する事、まことに世にならびなし。あるとき穆王、駿馬を八疋もとめ給ひて、すなはち造父をぎよしやとして、みやこをいで、西の方はる／＼ぎやうがうなされ、駿馬にくるまをひかせつゝ、こゝろにまかせてゆさんなし、かへらん事をわすれ給へり。故に、朝廷のまつりごとすたれ、たみの心もそむきけり。こゝに、東の方に徐夷といふものあり。穆王久しくゆうらんして、かへらせたまはぬよしをき、よきおりからと思ひつゝ、「(十三丁表) すなはちむほんをおこして、みづから徐偃王となりて、其いきほひにつのりしかば、国々の諸侯共、おほく徐偃王におもひつきて、穆王を見すてたてまつる。それ穆王の、はじめくらゐにつき給ひし時は、天下太平におさまりて、英明の主君たりしも、かの造父をもちひて、ゆうらんにつけり給ふゆへ、つゐにまつりごとみだれて、周家の王業おとろへり。しかるときは、天下の君、よく／＼つゝしむべきとかや。」(十三丁裏)

挿絵 「(十四丁表)

挿絵 「(十四丁裏)

戲 挙 烽 火

周の幽王と申て、御門一人ましますが、褒姒といひし美人あり。つねにてうあひありしかども、褒姒つゐに多きをふくむ事なし。然るに、幽王、いかんともして褒姒に一たびわらはせて、多いらんあらん事のみをおぼしめされて、いろ／＼心をつくして、褒姒をよろこばしめんとしたまへども、つゐにわるふ事もなし。これよりさきに、幽王、国々の諸侯共にやくして云、もしみづからにてきをなす者ありて、ぐんびやういたる事あらば、墩上につけふりをたて、たかく烽火をあぐへきなり。しかる時は、なんじたち、つわもの「(十五丁表) をひきぐして、いそぎみやこへあつまりて、われにみかたを申せと、かたくけいやくしたまへり。ある時、幽王、褒姒がわらひを見たまはん事をあこがれて、まことになんのゆへなきに、すなはち烽火をあげ給ふ。国々の諸侯とも、このよしを見るよりも、すはやみやこにむほんありとて、ぐんびやうどもをひきくして、われおとらじといそぎしかば、そくじにみやこへいたりぬれ共、なんのしさいもなかりけり。たゞ褒姒がわらひを見たまはんがためとかや。もろ／＼の諸侯たち、こはゆへなきに、むなしくみやこへあつまり、たがひにさんくわい申かやとて、みな／＼「(十五丁裏) おほきにわらひたまへり。これよりこのかた、国々の諸侯たち、幽王をしんじたまはず。其後、犬戎すでにむほんをくはたて、幽王をせめしかば、幽王、則烽火をあげて、諸侯のきたるをまち給ふ。国々の諸侯たち、このよしを見るよりも、たがひにおもはれけるには、かの褒姒にたはぶれて、わらはさしめんがためなるべし。しよせんまいりて多きもなしとて、ひとりもきたるものはなし。故に、幽王、つゐに犬戎にほろぼされて、驪山と申ところにて、むなしくならせ給ひ

けり。此時、褒姒もいけどられて、犬戎が手にぞわたりける。こゝをもつて見るときは、それ天下の公たる人」(十六丁表)は、つねに女色をとをぎけて、まことにちかづくべからず。もし女色にちかづくときは、かならずこゝろまよひつゝ、我か身のがいをしるべからず。故に、幽王も褒姒に心をまよはされ、つゐに我か身をがいしつゝ、国をほろぼし給ひけり。」(十六丁裏)

挿絵 「(十七丁表)
挿絵 「(十七丁裏)

秦の始皇帝とて、みかど一人ましますが、不老不死のくすりをもとめたまはんとて、仙境をたづね給へり。しかるに、海中に蓬萊・方丈・瀛洲とて、三つの山あり。もとより此山には仙人のすむところなり。始皇帝、この山へいらん事をねがひ給ひて、東の方、海上をめぐり給ふ。こゝに斉の国より方士徐市といふものきたり、始皇の不死のくすりをもとめたまふよしをきゝ、すなはち始皇をあざむいてはいはく、まことに海上に蓬萊・方丈・瀛洲の三つの山ある事は、かくれなし。われ、つゐにこの山へいたりたる事は候はね」(十八丁表)とも、つねに海上におゐて、この山のありける所をば、よく見さだめ申なり。君もし長生不死のくすりをもとめたまはんとおほしめさば、としわかき男女共と、そのほかよろつの諸しよく人を、われらにつけてたまはゞ、すなはちかの山へいたりて、不死の薬をもとめて、たてまつらんと申せしかば、始皇、徐市がいつわりをは、ゆめ／＼しろしめされずして、ついに男女三千人、その外よろつの諸しよく人を、徐市にそへさせ給ひて、おほくのふねをもよほして、海上にうかべつゝ、不死のくすりをもとめさせ給ふ。徐市、此おほくの人をひきくして、海上をめぐりつゝ、こゝの」(十八丁裏)しま、かしこの山の、よきところのちをもとめて、すなはちその王と

なり、不死のくすりをもとむる事はさておきぬ。おもひのまゝに始皇をたぶらかして、つゐにみやこへかへらず。それ秦の始皇は、六国の王をたいらげて、天下一同うにし給ひて、よろつこゝろにかなはずといふ事なし。しかりとは申せ共、心のまゝにえがたきものは、いのちなり。故に、方士がことばをまことゝして、不死のくすりをもとめ給ふ事、まことにそれ、ぐちならんや。其後、漢の武帝にいたりて、又、方士をつかはして、蓬萊山にすまぬする、安期生といひし仙人をもとめ給ふといへ共、つゐにかなはず」(十九丁表)ざるとかや。まことに不死のくすりとやらんは、みなこれ浮世のいつはりなり。こゝをもつて、後世の人、かならず方士をちかづけて、心をまよはす事なかれ。」(十九丁裏)

挿絵 「(二十丁表)
挿絵 「(二十丁裏)

秦の始皇帝とて、くらゐにそなはり給ひてより、三十四年と申に、李斯といふ臣下あり。よく始皇のこゝろにかなへり。あるとき、始皇、李斯がそうもんにまかせて、ことごとく天下の四書五経、そのほか百家の書物をあつめて、のこらずこれをやきすてゝ、たゞ医書と卜筮の書のみ、のこしたまへり。もしも天下に書物をかくしをくものあれば、則とらへてとがにおこなひ、二たび天下に書物をよむ事をゆるさずして、かたくがくもんをきんぜいし給ふ。然るに、兩人ともをなして、詩と書をよむものありしを、すなはち是をとらへ」(二十一丁表)つゝ、市にてころし、人めにさらしたまひけり。又、いにしへの事をひき、当代をそしめるものあれば、たちまちとらへて、君にそうもん申けり。もしさなきともがらは、その身もともにおなしとがにおこなはる。こゝに侯生・慮生と申て、二人の儒者のありけるが、始皇のぶたうに

まし〜て、仁儀をそむき給ひしを、つね〜そしりたてまつりしが、又、二人のじゆしやおもひけるには、われ〜かくてあらましかば、さだめてがおこなはるへし。かくてはかなふまじとて、いづくともなく身をかくして、あとをひそめていたりしが、始皇、このよきこしめし、おほきにいか「二十一丁裏」らせ給ひておほせけるには、この二人のものどもは、つねにせんなき仁儀五常のみちをととき、人の心をまよはせり。しよせんかれらをとらへて、ちうせんにしくはなしとて、たちまち御史をつかはせたまひて、かの二人の儒者をとらへいだして、いろ〜せめさせ給ふゆへ、君をそしりしじゆしやどもを、たがひにその名をあらはせしかば、以上その数四百六十餘人とかや。みな〜これをとらへて、咸陽といふ所に、おほきにあなをほらせつゝ、かの四百六十餘人の者を、いきながら此あなへおとし入れたまへり。つら〜おもんみれば、いにしへよりの帝王、天下を太平に「二十二丁表」おさめたまはんに、まづじゆしやをたつとび、仁儀のみちをおもんじたまへり。しかるに、秦の始皇は、ひとり仁儀のみちにそむき、よろつの書物をやきつくす。そのつみあげてかぞふべからず。かるがゆへに、秦の天下はほどなくほろびてげり。しかるに、漢の天下はじまりて、高祖皇帝、魯国をとらせ給ふとき、大牢のに多をもつて、孔子の廟をまつりたまへり。又、其後、文帝の代にいたりて書の律そなはり、又、武帝の代におよんで六經をあらはし給へり。しかるに、武帝、公孫弘といひし儒者を宰相のくわんになさせ給ひて、あまねく天下にがくもんをひろめ給ふ。故に、孔子の「二十二丁裏」をしへ、ふたゝび天下にさかんなり。それ秦の天下のほろぶると、漢のてんかのさかんなるとは、こゝをもつてくわんずべし。「二十三丁表」

白紙「(二十三丁裏)

挿絵「(二十四丁表)

挿絵「(二十四丁裏)

おほきに 宮二 宮 室一
大 宮二 宮 室一
秦の始皇帝のとき、咸陽といふ所に、みやこをたてさせ給ひけり。然るに、ぜんたいよりの宮殿は、すこしきなりとおほしめし、すなはち渭南上林苑と云所に宮をいとなみたまひけり。又、殿前に一座の宮をたて給ふ。これを名つけて、阿房宮といへり。この宮殿、さしむくわうだいにして、ひがしよりしにいたりて、よこにひろき事、五百歩なり。又、南より北にいたりて、すべて五十丈とかや。かみには一万の人をもさせしめ、しもには五丈のはたをもたてつべし。まことに宮殿のひろき事、たとへをとるにためしなし。又、「二十五丁表」東西南北へはしりめぐるに、閣道をたて、殿下よりすぐに南山までつくりつゞけり。しかるに、南山のいたゞきをひようして、闕門をたてたまへり。その北のはしよりして、二ぢうにろうかをかけ、すぐに渭水といひし大河をかけたし、咸陽宮までつくりつゞけり。以上、そのほかきうでんのかず、三百所たてならべり。此きうでんのうちには、みずをかけ、とちやうをはり、くわげんのだうぐをそろへ、よもの美人をあつめて、宮中にみとしめ、君つねに遊幸をなしたまへり。それ、おもんみれば、いにしへよりの帝王は、たみをあはれみ給ふゆへ、みだりにたみのちからをつるやさず。「二十五丁裏」しかるに、始皇帝は、天下ばんみんのちからをつるやし、かゝるくわうだいに宮殿をいとなみて、多いぐわをきはめて、我が身ひとりのたのみとす。故に、ばんみん君をうらみつゝ、項羽のむほんにしたがへり。始皇、つゐに項羽がためにほろぼされて、みな宮殿をやきくづせり。これ天下のきみたる人のかゞみとすべきところなり。「二十六丁表」

白紙「(二十六丁裏)

挿絵「(二十七丁表)

挿絵「(二十七丁裏)」

女 巫 出 入

漢の武帝と申て、御門一人ましますが、この時天下にみこかなぎのたぐひおほし。しかるに、みこ、禁中へきたり。宮中のきさきたちに申けるには、われ、よく神をいのりて、よろつ人のわざわひをまぬかれしめ、あるひは人をちやうぶくして、我が身のあたをほろぼす由を申せしかば、いづれもきさきたち、このみこをたのませ給ひて、我が身のきたうをさせたまへり。あるひは君のてうあひをあらそふて、たがひにねたみある人は、かのみこをたのみ、あたをちやうぶくしたまへり。然るに、みこ、木をきざみ、人がたをつくり、(二十八丁表)これをやのうちほりうづみて、これをまつりて、よく人をちやうぶくす。あるきさき、君のてうあひをあらそふて、たがひにねたみありしかば、いつわりをかまへて、武帝につけて云、たれ／＼こそは、みこをたのみ、木をきざみて、人がたをつくり、これを地中にうづみ、君をちやうぶくすと申せしかば、武帝、此よしきこしめし、おほきにいらせたまひつゝ、あまたの后をころし給ふ。しかるに武帝、ある夜のゆめに、木できさみたる人形、数千ばかり、いづれも杖をもちきたりて、われをうつと御らんじてより、すでにしんたいふあんにして、やまひのゆかにふし給ふ。こゝに(二十八丁裏)江充とて、一人の臣下あり。しかるに、武帝の太子、常に江充をにくませ給ふ。故に、江充、思ひけるには、すでにわが君武帝は、いくほどなく御としよらせ給ふゆへ、もしもむなしくなりたまはゞ、太子くらゐにつき給ふべし。さあらんにおいては、それがしつゝに太子にくまれ申ゆへ、ちうせられんはうたがひなし。しよせんたゞ此たび、武帝と太子の御中を、ふあんにいたし申さんとて、すなはちいつはりて、武帝へそうもん申けるには、君いまかやうにわづらはせ給ふ事は、これみなみこのなすわざなり。武帝、是をまことおほしめされけん、すなはち、江充におほせ(二十九丁表)つけ

られて、皆々みこをとらへつゝ、ろうへいれさせ給ふ。又、宮中の地中をほりて、かの木できさみたる人形あるかとたづねさせ給ひしかば、江充申けるには、それがし太子のまします宮中へいたりて、地中をたづねしかば、あまたのにんぎやうをほりいだしたり。是はひとへに我が君を、太子のちやうぶくし給ふと見えたり。武帝、江充がいつはりばゆめ／＼しろしめされずして、さもあらめやおほしめし、太子をにくませ給ひけり。太子、このよしきこしめし、こは何事ぞ。ゆへなきに、ちゝのふきやうをかうむるぞや。さらば申ひらかんとて、いろ／＼こゝろをつくし(二十九丁裏)給ふといへ共、つゝに武帝の御こゝろ、とくる事なし。太子、おほしめされけるは、べつのしさいにあらず。みな江充がはかりことなり。さらば江充をころして、わがほんもうをとげんとて、たち・ものゝぐをもよほして、すでに一せんにのぞみしかば、つゝに江充をいけどりて、則こゝろさせたまひけり。武帝、このよしをきこしめして、いよ／＼いかりをおこしての給ひけるには、いま太子、むほんをなす事、ひつでうなり。いそぎ太子をからめとれとありしかば、太子、此由をひそかにきこしめし、則しのびいで、湖縣といふ所迄おちゆき給ふが、かくてうきよにるろうして、せん(三十丁表)なき事と思召めし、たちまちみづからくびきりて、つゝにむなしくなり給ふ。此みなもとをたつぬれば、これみなみこのなすわざなり。武帝、はじめより、みこをきんぜいしたまはざるゆへ、みづからまよひの心いできて、江充がさんそうにより、とがなき太子をころし給へり。其後武帝、太子のとがなき由をしるしめされて、こうくわいなされ給ふといへども、いひてかへらぬ事なれば、くゝてもなんの多きぞなし。これまつだいにいたる迄、かゞみとすべき所なり。

帝鑑図説卷第九終 (三十丁裏)

挿絵 (三十一丁表)

挿絵 「(三十一丁裏)

(表紙) (題簽なし)

帝鑑図説卷第十目録

五	侯	擅	權	漢の成帝
市	里	徵	行	漢の成帝
寵	昵	飛	燕	漢の成帝
嬖	佞	戮	賢	漢の哀帝
十	侍	乱	政	漢の桓帝
西	邸	鬻	爵	漢の靈帝
列	肆	後	宮	漢の靈帝
芳	林	營	建	魏の明帝
羊	車	遊	宴	晋の武帝

笑 二 祖 儉 徳 宋の列駿 「(目録裏)

帝鑑図説卷第十

漢の成帝と申して、御門一人まします、はじめて御位につかせ給ふ時、御はゝかたの御一門、みな王うじの人々をよびいださせ給ひて、いづれもかうくわんにあげ給ふ。まづそのなかにも、王鳳と申せしをば、大司馬のくわんにあげ給ひて、大將軍となされ、よろづ天下のまつりごとをば、王鳳にまかせ給へり。そのほか、王譚・王商・王立・王根・王逢時、この五人をば、おなし日に、すべて侯のくらゐになしたまへり。故に、時の人、この五人を名つけて、五侯とこそは申けり。しかるに、此五「(二丁表) 人をくわんに

あげ給ふ時、よもにきなる霧たなびきけり。これをいかにとたづぬるに、成帝、いまくらゐにそなはり給ひてより、一門の人々を、ことごとくくめしいだし、高官にあげていせひにおごり給ふゆへ、天道これをいましめ給ふ事、あきらかなりしかども、成帝の御こゝろには、かくとはさとりまします。其後、又、王商・王根、この二人、すなはち王鳳につゞひて天下のまつりごとをつかさどりて、いせひにおごるはかぎりもなし。此とき、御一門、わううじの人々、今をかぎりと思いぐわにおごり、あるひは車をあかくぬり、はなやかにかざりて、われおとらじとおごる「(二丁裏) もの、およそ二十五人とかや。そのほかの諸官人、時のいせひにおそれつゝ、二十五人の一門へ、我もくといでいり、財宝をさゝげて、四方よりきたる者、たゆるひまはなかりけり。故に、わううじの人々、たがひにいせひをあらそふて、采花をもつてたつとしとす。あるひはおほきに家をたてゝくわれいをきはめ、あるひは赤墀をなし、連鎖をなしてひそかに禁中のていをまなべり。又、園のうちには山をきづきて、うてなをたて、あたかもてんしの白虎殿をひようせり。又、長安城の墻をひらき、しろの外より澧水のかわをひき、我が屋のうちをいたらしめて、すなはちこれを「(二丁表) いけとなせり。そのおごる事、かくのごとし。こゝをもつてしよくわんにん、いづれも上書して、君を諫ていはく、いまわううじの人々たち、いせひはなはださかんにして、ゑいぐわにおごれり。ねがわくは、かやうの事をきんせいし給へかすと、申せしかども、成帝、此事をすこしもきゝれまします。これによつて、わううじの人々たち、いよ／＼こゝろをほしひまゝにして、おそれはゞかる所なし。其後、成帝の御子に平帝と申せしあり。御くらゐにつきたまへども、いまだようせうにましますゆへ、御一門のともがらに、王莽といひしもの、ひとりいせひにおごりて、もつ「(二丁裏) はら天下のまつりごとをわがまゝになせしかば、天下みな王莽が手にしたがへり。故に、王莽つゐに平帝をころしたてまつりて、漢の天下を

うばひとり、みづから天子にそなはれり。それ天下の君たるへき人は、その一門のともがらには、金銀をあたへてふつきにさかへしむる共、天下のまつりごとにおめては、もつはら一ぞくにはからはすべからず。この王莽がやからをもつて、まつだいにいたるまで、かゞみとすべき事ぞかし。」(三丁表)

白紙 「(三丁裏)

挿絵 「(四丁表)

挿絵 「(四丁裏)

市里 徴行

漢の成帝、ひそかに禁中をしのびいで、ほかにゆうらんまします事をこのみ給へり。ひそかにしのびいで給ふは、その天子たる事を人にしられまじきゆへなり。故に、御てぐるまにもめしたまはず、又、百官公家の御ともゝなし。いやしき下人をめしつれ給ひて、あるときは小車にめし、又、ある時は御どもの下人にうちまじりなどして、たがひに小馬にのりつれて、あるひは市にいりてあそび、あるひは野外にいで、御心をなぐさめ、又はとをく鄰京のさとにいたつて、雞をたゝかはしめ、馬をのらせてご覧じて、ゆうらく」(五丁表) せさせ給ひけり。こゝに張放と申て、一人の臣下あり。くらゐを富平侯にはうぜられて、君のてうあひをうくる事、よにならびなきしんかなり。かるがゆへに、成帝、かたちをあらため、さまをかへて、われはこれ張放が下人なりとの給ひて、天子たるといふ事をば、ふかくつゝませ給ひけり。それ張放は、御門てうあひならびなきしんかなれば、さだめて張放が下人なりといはば、人もおそれをなすべきとおぼしめされて、かくぞなのらせ給ひけり。それおもんみれば、天子はくらゐたつとうして、かりそめ宮中をいで給ふにも、ぜんごにけいごの人をつれ、車には和鸞のすゞを付、」(五丁裏) 鳴珮のせつをたゞしうす。然るに、今、成帝は、みづからその身をか

るしめて、ある時はいちへいでゝあそび、あるひは野外にゆうらんして、みだりに張放が下人とならせ給ふ事、しゝてましますせんぞまで、はぢをあたへ給ふ事、申もをろかなりとかや。然るときは、いかでか天下のきみとして、万国をのぞみたまはんや。」(六丁表)

白紙 「(六丁裏)

挿絵 「(七丁表)

挿絵 「(七丁裏)

寵二 昵 飛 燕

漢の成帝、あるときひそかに禁中をしのびいでさせ給ひて、陽阿公主の家へいたり給ふ。然るに、公主の御うちに、よく歌をうたひ、まひをまふ女房あり。其なりすがたたぐひなく、又、まふかたちのかるき事は、つばめのとぶがごとくなり。かるがゆへに、其名をば飛燕とこそは申けり。成帝、この飛燕を御覧じて、御心によるこぼしくおほしめされけん、すなはちめして宮中へいれ給ふ。飛燕をてうあひまします事、よにならびはなかりけり。又、飛燕がいもうとに、合徳と申せしあり。よにかくれなき美人たり。成帝、此由きこし」(八丁表) めされて、又、此合徳をめしておなしく宮中へうつし給へり。こゝに披香殿の博士に淖方成といふ者あり。これひろきものしりたり。方成、ある時、成帝の御うしろにつきそひたてまつりていたりしが、飛燕・合徳、この二人の女子を見るよりも、すなはちこゝろの内にして、うらなひて見れば、この二人の女子は、君のためにはわざはひたり。故に、つはゞきして申けるには、それ漢の天下は代々火のとくをえて、天子のくらゐたゞしきなり。しかるに、此二人の女子を宮中へ入給ふ事、かならず天下ほろぼすべし。この二人のじよしは、わざはひの水にあたり。しかるときは、」(八丁裏) かならず火のとくをほろぼすへき事、うたがひなしとぞ申けり。其後、兄弟

の女子、君のてうあひをうくる事、いまだいくほどなかりきに、二人ともに・好のくらゐになし給へり。しかるに、兄弟のもの、思ひけるには、いかん共してほん後の許后皇をざんそうして、君にうとませ申ならば、われ／＼のきさきにそなはるへきとおもひつゝ、成帝にむかつて申けるには、まことに許后皇は、つね／＼我がきみをちやうぶくして、のろはせ給ふとうけたまはると申せしかば、成帝、この事をいつはりとはしろしめされず、さもあらめやと思召、つゐに許后をうとませたまひて、「(九丁表) 宮中におきたまはずして、昭臺宮へうつしおき、すなはち飛燕を一のきさきにそなへ給ふ。故に、つゐには君のとくおとろへ、天下のまつりごとみだれけり。それおもみれば、いにしへより、いまにいたる迄、国をほろぼし、天下をうしなひ給ふ事、一つにあらずといへども、第一女色をこのむ事、これ位をうしなふもとひたり。いま漢の成帝も、いやしき飛燕が兄弟を御てうあひのあまりにや、後にそなへ給ふ事、むかし夏の桀王の妹喜をあひし、又、殷の紂王の妲己をあひして天下をほろぼし給ふがごとし。漢の天下のおとろふ事、成帝よりもはじめれり。」(九丁裏)

挿絵 「(十丁表)

挿絵 「(十丁裏)

嬖・佞 戮・賢

漢の哀帝と申て、御門一人おはしけり。然るに、侍中の官に董賢と申て、少年の美男あり。そのなりすがた、やさしうして、よにたぐひなかりしかば、御かどてうあひまし／＼て、常に御座をおなじうし、おきふしひとつにしたまへり。故に、董賢がいせひたる事、よにならびなかりけり。しかるに、御門、董賢が家をたてゝえさすへきとおほしめし、すなはちせんじをくださせたまひて、あまたのばんじやうをあつめ、さしもくわうたいに家をいとなみま

せり。又、よろづの諸しよく人にいたるまで、君のめいにそむかじとて、「(十丁表) いたらざるはなかりけり。又は御くらゐにおさまりし、よろづぶくのだうぐ、あるひは金ぎんのうつわもの、あまたのたからをとりそろへて、董賢が家へをくり給へり。このとき、ひとりの臣下に鄭崇と申せしあり。しかるに、君、董賢を御てうあひまし／＼て、かやうにふるまはせ給ふをみて、こはいかなる事ぞと、君をいさめしかば、みかど、おほきにいからせ給ひて、すなはち鄭崇をからめとり、籠へ入させ給ひけり。あはれなるかな、鄭崇は君のかんだうかうむりて、久しく籠者のすまひをして、身やつれ、こゝろもつかれしかば、つゐにむなしくなりにけり。それ哀帝、「(十一丁裏) 御くらゐにつかせ給ふはじめには、天下のまつりごとあきらかにして、よくそのみちをおこなひて、明君といはれ給ひしかども、後年にいたりて、董賢をてうあひましますゆへ、つゐにこゝろまよひつゝ、君徳をくらまし給へり。」(十二丁表)

白紙 「(十二丁裏)

挿絵 「(十三丁表)

挿絵 「(十三丁裏)

十 侍 乱 政

漢の桓帝と申て、一人の御門あり。このとき中官に封ぜらるゝもの五人あり。左楯・貝瑗・徐璜・唐衡・单超、此五人ともに侯のくらゐになされけり。これを五侯と申なり。このおりふし、みかど官位をうりかいにし給へり。故に、かの五侯のもの、我も／＼ときぬ五十疋をさゝげて、くらゐをたかくのぞみしかば、君、此よしを御覽して、すなはち五人のものを高卿侯にぞなされけり。又、小黄門のくらゐに封ぜらるゝ者八人ありしが、これも金銀をさゝげて、くらゐをたかくのぞみしかば、則、八人ともに卿侯のくらゐにあげたまへり。」(十四丁表) このとき、かの五侯の人々、われおと

らじといせひにおごりて、天下のまつりごとをもほしひまゝになしてげり。
 故に、四方の国々、此五侯の人にそむかじとて、われもくまいないを
 さへげて、へつらはざるはなかりけり。このとき、てんかばんみんのくちずさ
 み、左館を名づけて左回天とぞ申けり。このころは、左館がいせひは、
 天子の心をうごかさんとめぐらさんと、左館がはからひ次第とかや。又、
 貝瓊をば貝独坐となづけり。この心は、その位たかきゆへ、よの人おそれ
 をなして、さらにちかづくものはなし。又、徐璜をば、徐臥虎とこそ申けり。
 此心は、其いせひを申せば、「(十四丁裏)ふしたる虎のごとくにて、人みな
 おちて、さらにちかづくものはなし。又、唐衡をば、唐兩隼とぞ申けり。此
 ころは、かれ我がいせひにおごりて、東といへば西といひ、西といへば東
 といふ。しかりとは申せども、人さらにあらそはず。よろつ心のまゝにせり。
 これはさておきぬ。さて又、左館が兄弟そのほか一族どもにいたる迄、み
 だりに官位をほしひまゝにして、あるひは一国の方伯となるもあり。あるひ
 は一郡の守護となる人もあり。みなくいせひにおごりつゝ、まいたないをむ
 さぼり、法度をやぶりて天下のたみをくるしめり。まことにこれは盜賊とひ
 としきなり。故に、「(十五丁表)たみ百性、こゝやかしこへにげさりて、わ
 れもくぬすみをせり。其後、中常侍の官に、曹節・王甫・趙忠・
 張讓、これらの人々、又かの五侯に相つみて、天下のまつりごとをほしひ
 まゝにおこなひて、たがひに同道をたて、我にそむくものあれば、からめ
 て籠へぞ入にけり。又、桓帝のしんかに、竇武・陳蕃・李膺とて、此三人
 のもの共は、世にならびなき賢人なり。故に、ふかく是をそねみつゝ、こ
 の三人の賢人、おなしくゝるい百餘人まで、なんのゆへもなかりしに、こと
 くくうちころして、おのれくがいせひにおごりて、一天四海をみだしけ
 り。いまだいくばくほどもへざりしに、竇卓「(十五丁裏)といひしもの、す
 でにむほんをおこし、つゝに桓帝をながしたてまつりて、漢の天下をほろぼ

せり。それ天下のきみたる人は、つねにけんしやをちかづけて、侯者をかた
 くとをざけば、其くらゐ久しうして、天下も太平におさまるべし。いま漢の
 桓帝は、ねいしやのおごりをきんぜざるゆへ、すでにらんげきおこりつゝ、
 天下をうしなひ給ふとかや」(十六丁裏)

白紙 「(十六丁裏)

挿絵 「(十七丁表)

挿絵 「(十七丁裏)

西邸 西邸 爵

漢の靈帝と申て、みかど一人ましますが、西園のうちにおゐて、一つの邸舎
 をたて、市の店屋のごとくにして、官位をうらせ給へり。官位に大小の次
 第あり。故に、官をかふにも、又錢の多少あり。二千石の官をば錢二千
 万にそうられけり。四百石の官をば錢四百万にぞうり給ふ。さて又、ざしき
 のくらゐをば、おなし官とは申せども、錢をおほくいだせしをば、かみ座に
 こそはなをしけり。又、一縣一郡をうり給ふに、よき所をばたかくうり、あ
 しき地をばやすくうれり。かるがゆへに、とみなる者は一度に錢をいだして、
 すなはち官に「(十八丁表)のぼり、又、まどしきものは、まづくわんにあが
 りつゝ、後には一倍の利をくはへて、錢をおさめたてまつる。又、ひそかに左右
 の人におほせられて、公卿の位をうり給ふ。公卿はこれ、大官なり。公の官
 をば錢千万貫、卿の官は五百万にぞうられけり。かくて官をうらせ給へる其
 錢をば、ことくくあつめて、西園の内にくらをたて、すなはちおさめ給へ
 り。そもく靈帝の、かやうにくわんをうらせ給ひて、錢をたくわへ給ふ事
 の、ゆへをくわしくたづぬるに、靈帝、はじめ、いまだ侯の位にておはせし
 と、つねにまどしくましめて、そのくるしみをわすれたまはず、いま御く
 らぬに「(十八丁裏)つかせ給ふといへども、桓帝の御とき、すこしも金銀

をたくわへたまはずして、ざいはうのなき事をうらめしくおぼしめされて、
 故に、くわんをうり、銭をあつめ給へり。それ朝廷の官位は、よく賢才
 をゑらびて、みだりにくわんにあぐべからず。されば、尚書にいわく、くわ
 んをば、私昵におよぼさず、爵をば悪徳におよぼす事なかれ。任意人にあ
 たへば、なをよからずといへり。しかるを、いはんや官をうりて銭をたくわ
 へ給ふ事、是もつて道にあらず。それ天子は天下を太平におさめ、まつりご
 とをたゞしうし給はゞ、これ金銀にはまさるべし。然るに銭をたくはへて、
 よくしんにまよひ」(十九丁表) 給ふ事、かみは朝廷の名器をやぶり、しも
 は百性のかいをのこせり。故に、いまだ五年もすぎざりしに、天下おほ
 ひにぬす人おごりて、みだれがはしくなりしかば、いかでか位をたもつべし。
 つみに位をうしなひ、又、西園のくらにたくはへ給ふ銭なども、みなちり/
 \になりしかば、ろうしてかいはなかりけり。これ大学にとけるがごとく、
 一人たんれいなれば、一國らんをおこすといふ、此ほんもんにことならず。」
 (十九丁裏)

挿絵 「(二十丁表)

挿絵 「(二十丁裏)

列肆 後宮
 漢の靈帝の時、きさきたちのおはしける後宮のうちに、店屋をつくり、い
 ろ／＼のたからものをてん屋のたなにつみかさね、后たちをめしつれ給ひて、
 彼てん屋へいで、いちまちにてあきびとのうりかいをせしありさまを、ま
 なばせ給ふ。又、ひそかに人をしてん屋のうちへつかはされ、かれ是のうりも
 のをぬすみ、我が人のとあらそひて、けんくわをさせて見給へり。これまこと
 にいちまちにて、あきびとのあらそふもやうにことならずや。靈帝、又、御衣
 をあらため、あきびとのていにさまきかへ、御ともに宮女をめし」(二十一

丁表) つれまじく、酒うる市へたちいで給ひて、御さかまりのたのしみ
 は、申もろかなりとかや。故に、靈帝のとき、奸人邪嬖の人おほくお
 ごれり。こゝをもつて天道もいかりをくだし、ばんみんも君をうらみたま
 つりて、わざはひ度／＼おこりけり。しかりといへども、賢人をちかづけて、国
 のまつりごとをさせたまはず。たゞあけくれ宮中に遊樂して、いやしきあき
 人のていをまなび、羊狗のかんむりをちやくし、驢馬にのらせたまひつゝ、
 みづからくつわをとり、やぶれたるいしやうをめされて、我とこゝろをほしひ
 まゝにしたまへり。かるがゆへに、ばんみんきみをおそ」(二十一丁裏) れず、
 ぬす人おほく世におこりて、漢の天下ほろびけり。これ靈帝のつみ、のがる
 ゝにところなし。」(二十二丁表)

白紙 「(二十二丁裏)

挿絵 「(二十三丁表)

挿絵 「(二十三丁裏)

芳林 營 建

魏の明帝と申て、御門一人おはしけるが、御くらゐにつかせ給ひてより、
 おほきに宮殿をつくらせ給はんとおぼしめされて、すなはち許昌宮をつく
 り、又、洛陽宮をたて給ふ。故に、天下のばんじやう、又、やく人にい
 たるまで、数年やすまるひまもなし。又、秦・漢の代に、長安城の中につ
 くりおかれし鐘架、銅橐駝、又、銅承露盤にいたる迄、のこらず洛陽へう
 つされけり。然るに、銅をもつておほきに人のかたちをいて、是を翁仲と名
 づけ、司馬門の外にぞおきたまふ。又、銅をもつて黄龍と鳳凰
 をいて、これを御殿のまへにおき」(二十四丁表) 給へり。又、一座の土山を
 芳林園の中にきづき給ふが、すみやかにじやうじゆせん事をおほしめされて、
 公卿の官にゐて、くらゐたかき臣下をも、みな／＼いださせたまひて、つち

をはこばせ給ひけり。故に、山、ほどなくじやうじゆしければ、おほくの草木をあつめて、かの山にうへ、又、とりけだものをとらへて、この山の中へはなし給ふ。これすなはち、まことの山にたがはず。然るに、高堂隆・衛覬・董尋、この三人、きみをいさめ申さんとて、すなはちいさめの書をかいてたてまつりしか共、明帝きゝいれまします。ゑいぐわにおごり給ふ事、つゐにやむ事なかりけり。まことに「二十四丁裏 天下ばんみんの力をつゐやし、又、公卿のくわんは、朝廷のもとよりうやまふところのものと共、土をおほせ、山をつくらせ給ふ事、これ人の君として、臣下をつかふにれいをもつてするのみにしろしめされず。明帝、くらゐにつかせ給ひて、いまだいくほどなかりしに、はやく崩御ましゝて、又、御くらゐをゆづり給ふ、代づきの太子もなかりけり。故に、魏の天下、つゐに司馬氏にうばはれしかば、かのあかゞねにてつくり給ふ翁仲、又、土山のもてあそび、はたしてこれはたれがためぞや。」(二十五丁表)

白紙 「(二十五丁裏)

挿絵 「(二十六丁表)

挿絵 「(二十六丁裏)

羊 車 遊 宴
晋の武帝と申て、みかど二人ましますが、呉国のでき、たいぢなされてより、御ころにおぼしめされけるには、いま天下一たうにして、四海太平におさまりぬれば、べつのしさいもなし、とおほしめされけるあひだ、つゐに御心ほしひままにして、あけくれゆうらんをこのみ、しゆゑんをたのしみたまひて、天下のまつりごと、次第々々におとろへり。然るに、宮中に一万人のきさきあり。故に、こなたをてうあひし給へば、あなたのうらみあり。あなたをあひしたまへば、こなたのなげきあり。いづれのきさきの御かたへか」

(二十七丁表) 御ゆきをせさせ給ふべきと、御心のうちには、かなたこなたとおほしめし、つゐにさだまる所なし。故に、くるまにめされて、ひつじにこれをひかせつゝ、つぼねをめぐりましゝて、かの羊のゆきとゞまりし所の御つぼねにいらせ給ひて、すなはちしゆゑんをもよをし、御ゆうらんましゝて、たのしみ給ふはかぎりなし。このゆへに、きさきたち、君のみゆきをのぞませたまひて、あるひは竹の葉をとり、つぼねのほとりにさし、又はつづから竹の葉をもち、羊をまねき給ふもあり。あるひはしほみづをもつて、つぼねのほとりにそゞぎつゝ、ひつじのきたるをまち「(二十七丁裏) 給へり。もとより羊は竹の葉をこのみ、しほをこのむものなれば、いかんともしてひつじをまねき、君の車をとゞめて、てうあひをえんがためとかや。武帝、かやうにいんらんにおごり給ふゆへ、国家の政事をおさめたまはず。こゝに第一の御きさきのちゝに、楊駿と申あり。しかるに、楊駿みづから朝廷のけんへいをとり、天下のまつりごとをほしひまゝにして、ひとりいせひにおごりぬれば、内外の人々も、みな楊駿におそれざるはなかりけり。故に、朝廷のまつりごと、次第々々にみだれぬる事、申もをろかなりとかや。又、武帝の太子に恵帝と申せしあり。しかれ共、「(二十八丁表) 恵帝ぶたうにましますゆへ、ゑびす国よりむほんをなして、五胡の乱おこりつゝ、つゐにはみやこのわざわひとぞなりにけり。つら々おもんみれば、武帝、はじめ呉国をたいらげ給ひてより、よくそのころをつゝしみ、まつりごとをたゞしくおこなひまします。さば、てんかいよ々おさまりて、聡明のきみとあをがれ給ふべし。さはなくして、あまつさへ楊駿ごときのねいじんをもちいて、政をはからはせ給ふゆへ、天下にらんげきおこる事、ことほりとこそきこえけり。」(二十八丁裏)

挿絵 「(二十九丁表)

挿絵 「(二十九丁裏)

笑ニ祖 儉徳

宋の列駿とて、御門一人おはしけるが、もとより榮花をこのませ給ひて、先祖のたておかれし宮殿は、誠にこれいやしうして、ことにせまきをきはせ給ひて、すなはちおほきに宮殿をいとなみ、四方の垣・壁・柱などいたるまで、錦をもつてつゝみ、くわれいにかざり給ひけり。故に、高祖のときにすまひし給ひし御殿をば、いま列駿の時にいたりて、なづけて陰室といへり。然るに、この陰室には高祖の御服をおさめておき給ふ。あるとき列駿、此陰室をこぼちて、玉燭殿をつくらせたまはんとおほしめし、もろ／＼の臣下を「(三十丁表)めしつれ、いんしつに御ゆきなされて見給へば、床のほとりには、一つのつちどあり。又、かきのうへには一つの灯籠をかけておけり。是則、葛布をもつて是をはれり。また、かたはらには蠅弘をかけておく。是麻のおをもつてくめり。かやうに高祖のときには、よろづのうつものまでも、すこしもかざりまします。故に、これをとめて後の子孫にしめして、いましめをたれ給へり。こゝに袁顛と申しんかあり。此よしを見るよりも、高祖のふつきにをこり給はぬ由をほめたてまつりて、いま列駿のおごりをいましむ。列駿、此よしきこしめし、笑はせ給ひておほせけるには、それ「(三十丁裏)高祖はいやしき囊人にて御座ありけれ共、たつき天子のくらゐにそなはり給へり。故に、位たつとくましませども、いやしきときのころをば、すこしもわすれまします。おもへばこれ、灯籠・蠅弘なども、高祖のぶんにはすぎたり。しかるに、いまわがくらゐとおなしやうにおもはん事、いはれなしとぞおほせける。故に、くらゐにつかせ給ひてより、いまだ一年もすぎざりしに、玉燭殿のうちにして、つゐにむなしくなり給ふ。その御子に子業と申せしあり。くらゐにつかせ給ふといへども、あくぎやくぶたうにましますゆへ、たちまち天下をうばはれて、位を

うしなひ」(三十一丁表)たまひけり。それ天下の君たる人、ゑいぐわにおごりましますば、わざはひしそんにおよぶ事、こゝをもつてつゝしむべし。

帝鑑図説卷第十終 「(三十一丁裏)

挿絵 「(三十二丁表)

挿絵 「(三十二丁裏)

